

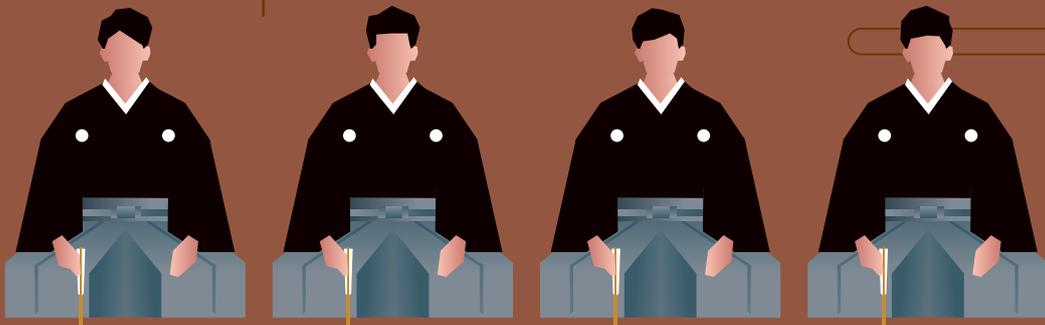


Sapporo
education and
culture hall
news

R a k u

69

能楽大連吟うたいの喜び



「特集」

能楽大連吟

うたいたい の喜び

日本には、長い時間をかけて受け継がれてきた、多くの伝統文化があります。歌や踊り、物語、美しい衣装や音楽などが一体となった「能楽」も、その一つです。能楽は今からおおよそ700年以上前、室町時代に現在の形が整えられました。人形浄瑠璃や歌舞伎といった、のちの日本の舞台芸術にも大きな影響を与えてきた、日本文化の大切な源流の一つです。これほど長い年月のあいだ、一度も途絶えることなく受け継がれてきた舞台芸術は、世界的にも非常に珍しい存在だといわれています。

現在でも、能楽の公演には「一度は本場で観てみたい」と、世界各地から多くの人々が訪れます。一方で、日本に暮らす私たちにとっては、「名前は聞いたことがあるけれど、実際に観たことはない」「難しそうで、どこから触ればいいのかわからない」と感じる人も少なくありません。言葉づかいや独特の表現、ゆったりとした時間の流れなどが、少し敷居の高いものとして受け取られているのかもしれない。

そうした能楽を、もっと身近に、もっと気軽に楽しんでもらえないだろうか。観るだけでなく、実際に関わってもらうことで、能楽の魅力を体感できる方法はないだろうか。そんな能楽師たちの思いから生まれた取り組みが「能楽大連吟（のうがくだいれんぎん）」です。

能楽大連吟とは

私たちは日常の中で、カラオケや学校行事、宴会の席など、さまざまな場面で歌

を口ずさみます。歌うことは、誰にとっても身近な表現行為です。能楽は、文学や演劇、舞踊、音楽、美術といった多様な要素が結びついた総合芸術ですが、能楽大連吟は、能の音曲である謡（うたい）に注目した企画です。毎年、年末になると、ベートーヴェンの「第九」を大勢で合唱する催しが行われていますが、それと同じように、「能楽でも、みんな

で声を合わせて楽しめる場があれば、きっと親しみやすくなるはずだ」という考えのもと、2008年に京都で始まりました。

参加者は、プロの能楽師の指導を受けながら、日本を代表するお祝いの曲「高砂」を稽古し、本番では能の舞台の中で、全員で声を合わせて謡を披露します。舞台を「観る側」から「創る側」に一步踏み出すことで、能楽の世界をより深く感じ

る老若男女が体験できる能楽大連吟が札幌で初めて開催できることになりました。

日本の名曲である「高砂」

今回の能楽大連吟の発表は、「高砂」を半能の形式で行います。半能とは、本来前後二場で構成される能の前半を省略し、後半のクライマックスから上演する形式のこと。かつての能公演では最後に半能を上演することで、めでたさをもって締めくくる慣習がありました。その半能や、さらに短い付祝言でよく謡われてきたのが「高砂」です。

「高砂」は、結婚式や新年の宴席など、お祝いの場で古くから親しまれてきた能の名曲です。物語は、旅の途中の神主が、高砂の浦で仲むつまじい老夫婦に出会うところから始まります。二人は、遠く離れた高砂（兵庫）と住吉（大阪）の松が、夫婦のよう

ることができると。

能楽大連吟は、初回から想像を超える応募が寄せられるほどの反響を呼びました。参加者からは、「難しい」と思っていた能が、ぐっと身近に感じられた」「自分が能の舞台に関わる日が来るとは思わなかった」といった声が多く寄せられています。回を重ねることに新たな参加者も増え、現在では京都だけでなく、大阪や滋賀、九州など、全国各地で開催されるようになりました。

札幌で初開催

教育文化会館ではこれまでも能楽の美しさや響きを、より多くの人に身近に感じてもらうためのさまざまな取り組みを続けてきました。「能に触れる機会」として小・中学生のための能楽入門や、従来とは異なる視点での能面・囃子方楽器の特別展示のほか、VRを使った能舞台体験や、能の演目をモチーフにした脱出ゲームなど、様々な視点からの入口作りを行っています。

公演でも、クラシック音楽とのコラボレーション公演「雅 vol.1 - Miyabi - CLASSIC x NOH」弦楽四重奏と能が織りなす新たな世界―や、プロジェクト「石山緑地新能 あたら夜の月影―覧古考新―」など、従来のイメージにとらわれない能楽の楽しみ方も提案してきました。こうした活動の積み重ねにより、能楽堂がなく、能楽と接点を持ちにくい札幌の地においても、能楽に興味を持つ人々が増えてきています。そんな流れのなか、



スマホからはこちら



能楽大連吟
札幌
特設サイト

「インタビュー」

松野 浩行 — 観世流シテ方



松野 浩行

MATSUNO Hiroyuki

観世流シテ方
昭和49年生 京都市出身
幼少の頃より、祖父の観世流能楽師・故松野良輝より指導を受け、
1979年仕舞「合浦」にて初舞台
1994年より十三世林喜右衛門師に師事
現在は十四世林喜右衛門に師事する。
2001年独立。
石橋・乱・千歳・道成寺を抜く。
京都・横浜・神戸にて松野吟耀社（松野浩行社中の会）を主宰
滋賀県庁湖沼会講師

2008年より同世代のシテ方と共に能楽大連吟を主宰する。
2021年焚火能を始め、能楽堂を出た催しを多数開催し、2024年札幌・石山緑地薪能では演出を手掛ける。

松野浩行YouTubeチャンネル
matsu-noh on time にて
様々なことを発信している。



謡でつながる人と能 能楽大連吟にこめた思い

能楽大連吟はどんな発想から生まれ
参加者に何をもたらしたのか。
立ち上げメンバーの1人である松野浩行さんに
伺いました。

能楽大連吟をはじめた2008年
当時は、能楽師として独立して間
もない頃でした。その頃は同世代
の仲間たちと「普段やっている公
演やお稽古以外にも、一般の方
ちに能楽を身近に感じてもらう取
り組みをなにかやりたい」と、い
つも話をしていました。その中で
制作やデザイナーの仲間とともに
大勢で取り組める「合唱」という
現在の能楽大連吟に取り組むこと
になりました。

夢のような話だけど、参加者を
100人頑張って集められたらいい
のにと話していました。それがい
ざ募集を始めると100人を大幅
に越える応募者があったんです。
応募してこられたのは年長者の方

から小学生まで。老若男女に広く
届けることができる取り組みがで
きたとみんなで喜びました。

初めて100人揃って行った舞台
は想像以上に素晴らしく、まさに
奇跡のような体験でした。合唱と
いっても音声パートがあるわけで
はなく、みんなで一緒に謡うん
ですが、これがとても良いんです。
稽古を通して作り上げた声のま
まりや迫力。参加者の皆さんが一
生懸命取り組んでくれたことも伝
わってきて、すごく感動したこと
を覚えています。

謡での声の出し方、体の使い方は日
常では決して体験できません。稽古
を通じて今まで想像もなかった声
が自分から出てくるようになります。
自分の体の新しい面を発見でき
る。そんな機会はあまりないので
ないでしょうか。しかも能楽とい
うよくわからない世界のことなのに、
少してできるようなんです。

京都ではもう何年もやっています
が、札幌は今回が初めての開催な
ので私たちもとてもワクワクして
います。今まで出会ったことのない
方たちと一緒に舞台を踏めるこ
とを楽しみにしています。



1) 能楽大連吟 (2018年 京都駅ビル) 撮影: 上杉 遥
2) 第1回能楽大連吟 記者会見 (2008年) の様子
(左から深野貴彦、松野浩行、宮本茂樹 於: 京都芸術センター)
3) 能楽大連吟 (2015年 KBSホール) 撮影: 上杉 遥
4) 能楽大連吟 (2016年 東本願寺 能舞台) 撮影: 上杉 遥

イベント報告

教文能

熊野・二流一会・夜能

「日時」2025年10月29日(水)・30日(木)・31日(金)

「会場」札幌市教育文化会館 大ホール

一年を通して能と出会う

「教文能」が始動

札幌市教育文化会館では、教文能
伝統芸能シリーズの一企画として
親しまれてきた「能楽なう」を
令和7年度より刷新し、新たに
「教文能」を立ち上げました。展
示やクラシックとの共演、映像、
屋外公演など、多角的な試みを
重ねてきた教文能ならではの視点
から、一年を通して多様な能と
出会うきっかけを届けることを
目指しています。

対談を通じ、流派の違いや能楽へ
の向き合い方が立体的に語られ
ました。最終日は宝生流による
夜能「船弁慶」。朗読と雅楽、そ
して「謡宝生」と称される本格的
な能公演が融合した、新たな試み
となりました。
また三日間を通して大ホールロ
ビーでは、能面と花をモチーフに
した展示や空間演出が来場者を
迎え、舞台の内外で能の世界に触
れる体験が広がりました。「教文
能」は、次なる一歩を期待させる
シリーズの幕開けとなりました。

KYOBU
N
EVENT
REPORT

教文能 KYOBUN NOH

特設サイト

スマホからはこちら



A) 「熊野」母を思う和歌を一首読み上げる B) 「熊野」清水寺の花見に同行する C) 大蔵流狂言「因幡堂」
D/E/F) ロビー展示:能面と花のコラボレーション、和モダンN6北円山による展示、教文能3Days 巨大ポスター G) 夜能〜語り部たちの夜「船弁慶 後之出留之伝」アフタートーク
H) TALK EVENT 二流一会 - 金剛流と宝生流 - I) 「船弁慶 後之出留之伝」平知盛(とももり)の怨霊が薙刀を振りかざして襲いかかってくる
J) 夜能〜語り部たちの夜〜「船弁慶 後之出留之伝」朗読と雅楽

TOPICS.1

能楽大連吟札幌 参加者募集!

日本語の美しい響きと奥ゆかしさ、七五調のリズム、それらが凝縮された能楽の詞章である「謡(うたい)」を皆様に楽しんでいただくワークショップを3月より開催いたします。「能楽大連吟」ではプロの能楽師によるお稽古を経て、教育文化会館大ホールで半能『高砂』を参加者の皆さんで大合唱いたします。腹式呼吸による発声と背筋をピンと伸ばす美しい姿勢は健康にもよく、心を豊かにします。2008年に京都で始まった「能楽大連吟」は、滋賀、大阪、福岡と輪を広げ、2026年札幌でついに初開催。能楽と聞くと難解な古典芸能だと思われがちですが、一度足を踏み入れるとハマってしまうこと間違いなし!皆様からのご応募をお待ちしております!

市民参加型ワークショップ『能楽大連吟 札幌』

お申し込みはこちらから



教文情報誌 ACT 52:『謡』

スマホからはこちら



市民参加型ワークショップ

札幌

SAPPORO NOUGAKU DAIRENGIN

能楽大連吟

謡でつなげる、にっぽんのこころ

【参加者募集!】

ワークショップ開催日

オリエンテーション	2026年3月5日(木) 18:30
お稽古日程	2026年3月13日(金) 18:30 3月26日(木) 18:30 4月14日(火) 18:30 4月22日(水) 18:30
リハーサル	2026年5月8日(金) 18:30
発表公演	2026年5月10日(日)(予定)

会場: 札幌市教育文化会館 研修室401
発表公演: 札幌市教育文化会館 大ホール

参加費: 一般 10,000円 | 学生 8,000円 | 親子 15,000円

申込期間: 2025年10月29日(日) 申込締切: 2026年1月15日(日)

申込方法: 申し込みフォームより

講師: 能楽家 深野真由・松野浩行・齊藤信雄・柳下千夏

お問い合わせ: 011-271-5822(札幌市教育文化会館) 第2・4月曜休館 9:00~17:00

TOPICS.2

石山緑地薪能

あたら夜の月影 — 覧古考新 —

あたら夜の舞台が今、映像で蘇る —

2024年8月、札幌では約20年ぶりとなる薪能公演が実現し、チケットが即時完売するなど大きな反響を呼んだ「あたら夜の月影 — 覧古考新 —」。“誰もが楽しめる新しい薪能”をコンセプトに掲げ、天空をイメージした舞台、多彩なプログラム、そして最新テクノロジーを駆使した音響・照明・映像演出を融合させることで、650年前の薪能が現代の感性で鮮やかに蘇る一夜となりました。この特別な公演は、10台以上の最新カメラによって記録され、映像作品として生まれ変わりました。本作品には公演本編はもちろん、出演者のインタビューや設営風景なども収められ、公演当日の空気感を多角的に伝える内容となっています。舞台上の表現だけでなく、その背景にある思いにも触れながら、薪能という伝統芸能の奥行きを感じられる作品です。



©IAM Ltd. K.KAWAMURA

2026年2月23日(月・祝) ①開演 15:00 ②開演 18:30 ※開場は各回開演の30分前
【会場】札幌市教育文化会館 大ホール 札幌市中央区北1条西13丁目

石山緑地薪能
あたら夜の月影 — 覧古考新 —
特設サイトはこちら



術



化



Art
Culture
Human

09

演劇プロデューサー・俳優 小島達子



1)『二人で狂う…好きにだけ』 2)『病は気から』 3)『オトン、死す!』 4)『12人の怒れる男』

●撮影/高橋克己(二人で狂う)、クスマエリカ(12人の怒れる男/病は気から)

札幌で歩む演劇人生の
現在地とその先

ELEVEN NINESに所属する俳優として活動する一方、演劇公演のプロデューサーや俳優のキャスティングも手がける小島達子さん。その手腕は多くの人の目に留まり、現在はジョブキタ北八劇場アーティストティックコーディネーターや、札幌演劇シーズンのプログラムディレクターも務めるなど、多忙な日々を送っている。演劇を始めきっかけは偶然入部した高校の演劇部。その面白さにハマっていったものの東京へ大学進学してからは自ら舞台上立つことはなく、好きな演劇を数多く観て過ごした。父の死をきっかけに札幌に戻り日々を過ごす中で、高校時代の演劇仲間と再会。ダンス要員として声をかけられ、それまで関わる機会がなかった札幌小劇場演劇の世界に足を踏み入れた。最初はセリフひとつだけからのスタートだったが、与えられた役に真摯に向き合ううち、いつのまにか「札幌を代表するコメディエンヌ」と呼ばれる存在になっていた。初めて作品をプロデュースしたのは2001年。自分

が観たい芝居を自身が出演する形で制作した。2014年に上演した『12人の怒れる男』では、初めて完全な裏方としてプロデュースに専念。作品は高く評価された結果、現在までに3度の再演が行われ、そのたびに来場者を増やしている。2025年には札幌演劇シーズンのプログラムディレクターに就任。これまでは自分が関わっていない作品に強く意識を向けるということが少なかったが、仕事として札幌で上演される多くの舞台を観る中で、個人の好みを超えた札幌演劇という広い視点で作品を捉えられるようになった。そうした経験を重ねるうち、札幌で演劇をやっている全ての人が仲間のように頼もしく感じられるようになったと嬉しそうに語る。「どこへ出しても通用する作品がさらに数多く、札幌から生まれてほしい。私自身良い作品を作ると同時に、そんな環境をつくれるよう、これからも、仕事として札幌で頑張っていきたいです。」